

論理的認識力

—— 日常の論理の偏向に対応する認識能力の構造 ——

Logical cognition ability

— The structure of cognition ability which corresponds to a slant of daily logic —

青 山 之 典

Yukinori AOYAMA

I prescribe concept of the logical recognition ability as cognition ability which corresponds to a slant of daily logic. I pay attention to points of an outcome of the preceding study.

- 1) Human inference is dependent on a mental model. Therefore the possibility that the daily logic is deflected is high. It's necessary to consider truth or falsehood of semantic contents and the validity to correspond to a slant of daily logic.
- 2) Something in a broad sense and something in a narrow sense exist in a concept prescript of logic. Various concept prescript are intermingled, and it impedes progress of a study. It's effective to aim at logic in a narrow sense and plan for structuralization with a related concept.

I considered these points and did concept provision of the logical recognition ability as synthetic cognition ability of 3 of following lower rank ability.

- ① "Logic" is defined as causal relation in the whole structure, and it is defined when relationship in a substructure is supporting "logic". And they are placed as one of the lower rank ability.
- ② To interpret logic and relationship that support logic, the ability to consider truth or falsehood of semantic contents and the validity is placed as one of the lower rank ability.
- ③ To consider truth or falsehood of semantic contents and the validity, the ability to interpret background information on an expression subject and to consider it critically, is placed as one of the lower rank ability.

After the concept prescript of the logical recognition ability is described, a view of national language department Class is described.

1. 問題の所在

本稿では、「論理的認識力」を概念規定する必要性について論じるとともに、「論理的認識力」の概念規定を示し、「論理的認識力」を盛り込んだ国語科授業の展望を示すことを目的とする。

(1) 先行研究から

「認識力」という概念に目を向けてみると、波多野

他(1974)において、言語の機能を外的機能である伝達と内的機能である認識とに大別し、そのうち認識機能を言語の本質的な機能として認めている。さらに、国語科において「認識能力」を構造化する場合は、「統合的認識能力」を頂点として、思考と情動と結び合った「感性的認識能力」、思考と認知と結び合った「知性的認識能力」の二系列を認め、直観的思考、論理的思考、批判的思考、創造的思考といった思考技能によって構造化することの必要性を主張している。認

識と思考との関係性について考察し、構造化を図っていると考えられる。

さらに、森田 (2011) は、読むという行為がものごとに対する見方、考え方、感じ方を変容する機能を持っていることに注目し、「ものの見方、考え方、感じ方の力」として「認識能力」ととらえている。さらに、説明的文章の読みにおける「認識能力」として、論理 (森田は「ものごととものごとの関係」と捉えている) に関する「認識能力」を位置づけている。そして、読むという行為を支える能力を「論理的認識能力」と、それを支える読解基礎・基本技能とに分け、構造化している。森田の定義する「論理」はさらに「文章全体にかかわる関係」と「文章の部分の相互関係」とに下位区分されている。また、読む行為に確認の側面と吟味・評価の側面を認め、やはり「論理的認識能力」を構造化するものとして位置づけている。このような構造化は認識力に着目したときの読む行為のメカニズムについてとらえ、具体的な学習指導の構想を立てるとき、役立つものと考えられる。

認識力に関するこれらの先行研究は、認識と思考との関係性に言及し、その構造を詳細に渡りつかむところまで到達している。しかし、さらに緻密な構造について検討する必要は残されている。

例えば、波多野他 (1974) において指摘された思考技能群はどのように構造化され認識力として機能するのかといったメカニズムは十分に明らかになっていない。森田 (2011) については、授業づくりにおける具体的な提案性をもっているものの、「論理」の広義のとらえ方について、論理・論理的思考の概念整理研究において、検討を要することが指摘され、さらに検討を進める余地がある。したがって、論理・論理的思考の概念整理研究の成果を批判的に継承しつつ、波多野他 (1974) および森田 (2011) における論理的認識力の構造化をさらに進めていく必要がある。

(2)これまでの研究の経緯から

青山 (2012) では、PISA調査において我が国よりも上位に位置しているカナダ・オンタリオ州の読解カリキュラムの構造について検討した。その結果、カナダ・オンタリオ州の読解カリキュラムがスパイラル型の構造になっていることを明らかにするとともに、その基本構造としてStrandの存在を明らかにした。ただ

し、カナダ・オンタリオ州の読解カリキュラムには文学と説明的文章という分けがなく、全てを内包する形で構成されているため、説明的文章読解カリキュラムについて考察を進めるとき、具体的な部分では参考にしにくい面もあった。

青山 (2013a) では、アメリカ合衆国のCommon Core State Standards for English Language ArtsにおけるReading Standards for Informational Text (説明的文章の読解カリキュラム、以下RSITとする。) の全て (幼稚園～高校3年) を翻訳し、資料として提示した。さらに、そのまとめとして、次のような読解能力がStrandとして位置づけられていることを指摘した。

- ①根拠の的確な引用
- ②客観的な要旨の把握
- ③主張と根拠の整合性に視点をあてた細部の描写の分析
- ④語やフレーズの文脈における意味の確定
- ⑤筆者が使っているレトリックの与える影響力・説得力・魅力の分析と評価
- ⑥多様な媒体と形式による説得力の評価と利用
- ⑦根拠や理由づけの効果などについての把握と評価
- ⑧筆者のレトリカルな論理構築の把握と評価

そして、これらの能力群が有機的に関係づけられている点を指摘し、このような関係がスパイラル構造を実現していることを示した。

青山 (2013b) では青山 (2013a) を受け、Strand概念の導入による読解カリキュラム改善の可能性について考察を進めている。具体的には、要点・要旨把握指導の問題点を指摘するとともに、その原因をカリキュラム構造に見出ししている。また、RSITの要点・要旨把握指導に関わるStrandについて考察し、Strandを構成している指導事項の特長を生かすことで、問題を改善する可能性が高いことを明らかにしている。

青山 (2012, 2013a, 2013b) において考察してきたことをまとめると次のようになるだろう。まず、我が国の説明的文章の読解指導を改善する一つの道筋として説明的文章読解カリキュラムのスパイラル構造化を目指すという選択肢があるということである。そして、その実現に向けてStrandを構成することができる

ように、説明的文章読解に関わる能力を構造化する必要があるということである。

(3)日常の論理の偏向を扱える能力の構築に向けて

①日常の論理の偏向

ここまでの考察を踏まえ、青山（2013c）では、日常の論理の偏向に対応する認識力を概念規定する必要性について論じた。本稿で明らかにする内容に直接関わるものなので、少し詳しく述べることにする。

レアード（1988）が述べるように、日常的な推論においては領域固有の知識（メンタルモデル）を使うために、形式論理にそった推論が必ずしも行われず、バイアスが存在する。かつて、認識論においても、人間の認識の限界を自覚し、限界を乗り越えるための方法として論理学が生まれ出され、発展してきた歴史がある。しかし、推論はメンタルモデルに依存するという認知心理学の知見は論理学の限界をあぶり出すことになった。

中村（1993）は日常的な推論の限界に着目し、議論の正確さを求めるのではなく、蓋然性を明らかにすべきであると主張し、トゥルミンモデルを使った方法を提案した。しかし、トゥルミンモデルは学問領域ごとの知識に依存しており、日常的な推論は、必ずしも学問領域における知識に依存しているわけではない。このような場合、トゥルミンモデルを分析に使うのは適切でないという指摘があり（注1）、再検討が必要である。

市川（1997）も指摘しているように、人間は論理式を操作するような思考がおよそできず、メンタルモデルをもとにさまざまな場合を吟味していくというやり方をとる。また、メンタルモデルは「領域固有」のものであるがゆえに領域を越えると有効ではないにも関わらず、私たち人間はよく吟味することなく一般化してしまうような面を持つことも市川（1997）は指摘している。

ここまでに述べたように、日常的な推論はメンタルモデルに依存するためにバイアスを常に含み込んでいる。これは、私たち人間が「論理的」だと感じている推論も実は偏向している可能性を示している。このような偏向の可能性を含み込んでいるかもしれない日常的な推論に用いる「論理」を、青山（2013c）では「日常の論理」と呼び、それが多くの場面において偏向している可能性が高いことを指摘している。そして、

日常の論理の偏向には、無自覚な偏向もあれば、意図的な偏向もあると指摘している。（注2）

②論理・論理的思考の概念整理研究の動向

さらに、青山（2013c）では、論理・論理的思考の概念整理研究の動向についても、考察の対象としている。特に取りあげたのは、舟橋（2000）と幸坂（2011）である。

舟橋（2000）は、先行研究群における「論理」のとりえ方に課題を見出し、諸論考における「論理」観の整理を通して、「あるべき『論理』観」を明らかにし、「『論理』観を整理する枠組み」を提示している。

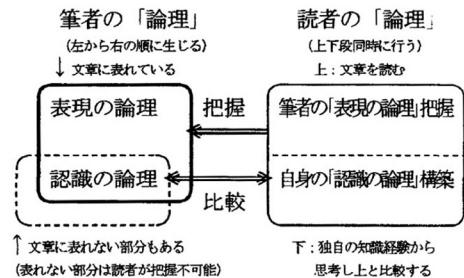


図1 「論理」観を整理する枠組み（舟橋（2000））

筆者の「論理」を把握する能力の育成にとどまらず、筆者の「論理」の妥当性を検討することによって読者自身の「認識の論理」構築を目指す舟橋（2000）の立場は示唆に富むものであり、この立場に立って、さらにそのような指導を実現するための目標、内容、方法について検討することが必要である。

幸坂（2011）は、舟橋（2000）を批判的に継承する形で「論理」・「論理的思考」に関する先行研究の再整理を行い、国語科教育における「論理」・「論理的思考」概念を整理するために、次のような新たな観点PLTを提案している。

- I 言語・物事の関係
 - I-1 言語間の関係
 - ア 関係の幅広さはどうか
 - 論証関係（狭義）—それ以外をも含む幅広い関係（広義）
 - イ 言語化されている度合いはどうか
 - ・接続詞などの言語によって関係が明示的に示されるか
 - ・関係の構成要素が暗黙化されるか

- I-2 言語と世界＝物事との関係
- II 人の頭の中で起こる思考
- ア 思考の種類は何か
分析, 比較, 順序, 推論, 分類など
- イ 言語表現に至る思考過程なのか, 言語表現に結果として表れた思考結果なのか
- ウ 思考主体は誰か
読み手, 書き手, 話し手, 聞き手
- エ (※思考主体が読み手, 聞き手の場合)
対象となる関係を捉えるだけか, それに加えて批判的に吟味するのか
- オ (※思考主体が読み手, 聞き手の場合)
自分なりの考えを持つのか持たないのか

PLTは、先行研究において概念規定されてきた「論理」・「論理的思考」が「言語・物事の関係」と「人の頭の中で起こる思考」とに大きく二分できることを明らかにし、前者を「論理」、後者を「論理的思考」と呼ぶことが望ましいと述べている。論理と論理的思考とを明確に区分けするこの指摘は意義がある。

また、PLTはこれまでの「論理」・「論理的思考」についての概念規定を踏まえ、「論理」・「論理的思考」を体系的・構造的に捉えることのできる成果である。したがって、これらの観点は「論理」・「論理的思考」の概念を明らかにしようと試みてきた先行研究の到達点であるとも見ることができる。

幸坂 (2011) が取りあげた論考のうち、特徴的な論考は、井上 (2009) と難波 (2009) である。

井上 (2009) は、形式論理学が意味内容を排除して概念の外延 (範囲) だけを問うことに問題意識をもち、一般意味論やレトリックの研究成果を導入した言語論理教育を構想している。そこでは、情報の真偽性・妥当性・適合性を一定の基準に基づいて判断し評価できるようにすることを目標としている。このような「論理」・「論理的思考」の捉えは日常の論理にも配慮した周到なものであるが、意欲的に研究が進められている情報の真偽性・妥当性・適合性についての指導目標や指導内容の構造化については、さらに検討を進める必要があると考えられる。

また、難波 (2009) は「論理」を因果関係としている。具体的には、事実と事実をつなぐ「原因—結果」および事実あるいは意見と意見をつなぐ「根拠—主張」

を取りあげ、自然／人文／社会科学全般において、また、実生活上において、もっとも重要な思考操作であると述べている。

さらに、難波 (2012) は「論理の種類」に言及しているが、こうすることでどのような意図や機能をもった因果関係なのかを捉えることができるようになる特徴があるといえる。

形式論理学の論理

非形式論理学の論理＝日常の論理

論証の論理…正しさを立証する

(例：科学論文、一部の評論文教材)

〈説明〉の論理…すでに正しいことの原因や理由などを説明する

(例：多くの説明文教材)

〈感化〉の論理…まだ正しいとは限らない主張によって受け手を説得する。

(例：一部の評論文教材)

「論理」の概念規定を因果関係に絞った狭義のものとしつつも、非形式論理学の論理を含めることで、形式論理学の問題点であった意味内容の排除をどう克服するかを検討していることが特徴的である。

また、難波 (2009) においては、「論理」の概念規定を狭義のものとするこゝでこぼれ落ちる関係性のうち、「順序 (時間の順序, 説明の順序)」「上下関係 (一般—具体, 概観—詳細)」を「広義の論理」あるいは「論理の準備段階」としてとらえている。論理／論証の教育の成立のための道筋を準備段階から考えている点は興味深い。

しかし、順序性や上下関係以外の関係性をどのように位置づけるのが明らかにされていない点が課題である。

また、井上 (2009) において重視されている情報の真偽性に関わる問題として、難波 (2012) では感化文が「偽の学び」を誘発する可能性を指摘し、根拠の妥当性の評価を必須のものとしているが、井上 (2009) における情報の真偽性に関する議論をカバーするものであるのかどうかは、さらに検討の余地がある。

③日常の論理の偏向をどう教育で扱うか

「論理」・「論理的思考」の概念整理研究は、論理／

論証教育の道筋をわかりやすいものへと前進させているが、因果関係以外の関係性はどうか扱われるべきであろうか。

日常の論理の偏向を考慮したとき、「狭義の論理」への着目によって、こぼれ落ちる能力群が多くあることを無視することはできない。そして、このこぼれ落ちる能力群の重要性に早くから注目した井上尚美をはじめとする広義の論理・論理的思考を支持する研究成果には学ぶべきものが多くあるのも事実である。しかし、その生かし方は、論理・論理的思考を広義のものとしてとらえるということではないと考える。なぜなら「論理」・「論理的思考」の概念整理研究によって見えてきた道筋をまた混沌としたものにするべきではないと考えるからである。

そこで、難波博孝が主張している、論理・論理的思考を狭義のものとしてとらえるという立場に立ち、こぼれ落ちる能力群を狭義の論理・論理的思考との関係によって再構造化することこそが必要であると考ええる。そこで、狭義の論理的思考力を根幹に据え、井上(2009)において提案されている能力群を再構造化することを考えたい。

山本(1988)は、哲学の部門として知識論、存在論、価値論を位置づけ、特に知識論の下に論理学と認識論を位置づけている。そして、論理学においては概念や命題の間での形式的で記号的な関係だけが問題とされるのに対し、認識論では概念や命題をわれわれの知識内容として問題にし、それらの意味のなりたちと、真であるための条件を問うと述べている。このような哲学の分野において問題とされている認識の有限性、不完全性に対応するために、認識論は論理学と相補的に発展してきたと考えられる。

このような発想を生かし、井上(2009)が重視した意味内容の真偽性や妥当性に関する検討について担当する能力群を概念規定し、論理的思考力と相補的な関係に位置づけることが望ましいと考えられる。具体的には、難波(2009)の考えを拡張する立場をとり、日常の論理に内在する偏向を前提に入れ、因果関係／因果律以外の関係性が論理／論証において果たす役割も考慮して、認識する能力を概念規定したい。

この能力は、認識論において考察されてきた人間の認識の有限性、不完全性を前提とし、論理学の成果によって適切な認識形成を求めてきた歴史の延長線上に

ある。そこで、この認識能力を「論理的認識力」と呼ぶことにする。

2. 論理的認識力の概念規定に向けた検討

(1) 論理的思考力を内包する能力構造

前章までの考察をとおして明らかにしてきたことは、論理的認識力は論理的思考力を内包する構造をもつ能力であるということである。さらにいえば、意味内容の真偽性や妥当性の検討について担当する能力群と論理的思考力とをそれぞれ別の下位能力群として内包するとともに、それらを相補的に機能させることで実現する能力であるということである。(図2)

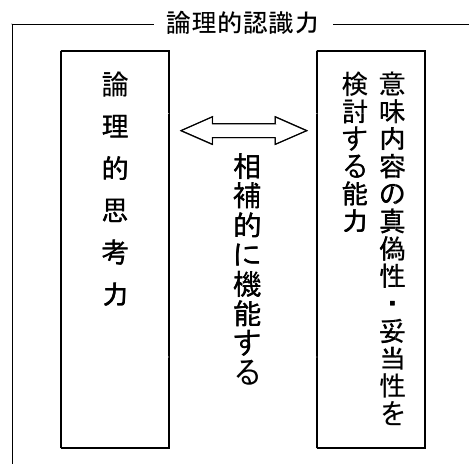


図2 論理的認識力の構造についての素案 その1

論理および論理的思考力の概念規定については、様々なものが存在するが、近年の概念整理研究においては狭義の論理的思考力の有効性が示されてきた。本研究においても、論理を因果関係とし、論理的思考を因果関係に絞った狭義のものとする難波(2009)の立場に立ち、論理的認識力の概念規定を進めていくことにする。

ここで、論理的思考力がカバーしていない能力(意味内容の真偽性・妥当性を検討する能力)の具体を確認しておくことにする。鍵となるのは、日常の論理の偏向を扱うための能力ということである。先に述べたが、日常の論理の偏向には二つのタイプがあると考えられる。それは、無自覚な論理の偏向と意図的な論理の偏向である。

無自覚な論理の偏向は、もともと人間の推論がメン

タルモデルに基づいて行われることによる。意識的に論理的思考を行おうとしている場合にも、推論はメンタルモデルに依存しているため、感情などによって常にバイアスが生じる恐れを人間の推論はもっているということである。認識主体として、このような恐れに自覚的になること、必要に応じて論理的に推論する姿勢と能力をもつことが求められる。したがって、意味内容の真偽性・妥当性を検討するとき、無自覚な論理の偏向が存在するかどうかを見極めようとする態度と実際に見極めるための能力が必要である。

また、意図的な論理の偏向は、さらに二つのカテゴリーに下位分類される。第1の意図的な論理の偏向は自らの認識をありのままに表現しようとすることによる。これは、どのような語を選び、どのように文章として構成していくかを考え続けることの必要性を示しており、その過程で、語の選択とその構成を司る論理は多様に偏向し続けるということを示している。認識主体として、表現に関わるこのような本質に自覚的になること、表現されたものの根源にどのような認識が存在するのかを推論する姿勢と能力をもつことが求められる。

第2の意図的な論理の偏向は他者を説得しようとするることによる。第1の場合と同様のプロセスで多様に論理は偏向し続けるが、第1の場合と異なるのは、虚偽を生み出す可能性があるということである。認識主体として、説得に関わるこのような本質に自覚的になること、説得の根源にどのような意図が存在するのかを批判的に推論する姿勢と能力をもつことが求められる。

これら二つの場合の意図的な論理の偏向について、意味内容の真偽性・妥当性を検討するとき、テキストに取りあげられた内容およびその表現の仕方から、表現主体の意図を見だし、その意図的な論理を的確に解釈するとともに、その偏向を的確に評価する能力が必要である。

つまり、無自覚な論理の偏向についても、意図的な論理の偏向についても、表現主体の背景（意図・目的・感情など）が強く影響しているということである。したがって、その影響について的確に解釈し、批判的に検討する能力も必要である。（図3）

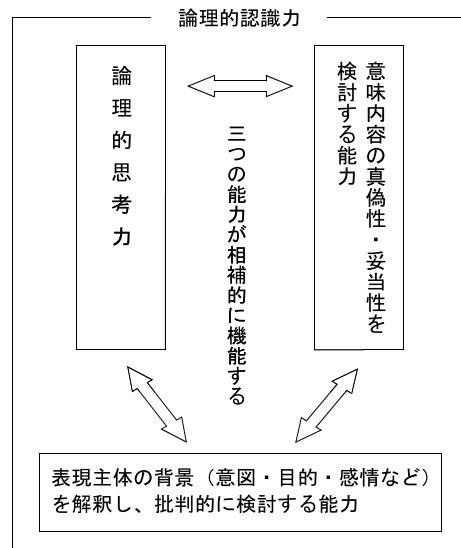


図3 論理的認識力の構造についての素案 その2

(2)その他の関係性の位置づけ

先に述べたように、論理的思考力を狭義のものとすると、その他多くの関係性がこぼれ落ちることになる。

そのうち、順序性と上下関係については、論理とどのように関わるのかが難波（2009）において明らかにされている。本研究においても、論理的思考力を因果関係に絞った狭義のものとし、その準備段階として順序性、上下関係を位置づけたい。

しかし、この他にも比較などの関係性があり、これらの関係性の解釈がどのように位置づけられているのかを考察しなければならない。

間瀬（2009）は、文章構造の単位として三つのレベル（マイクロ構造、メゾ構造、マクロ構造）を設定し、それぞれにおける論証を捉えるとともに文構造、文の接続関係、段落の接続関係と論証との関係を分析している。この分析手法は、論理やその他の関係性が機能する文章構造の単位に階層を認めている点で興味深い。

難波（2009）が設定している論理の種類は、間瀬（2009）のいうマクロ構造のものを中心に取りあげていること、また表現主体の意図や目的によって分類されていることが特徴である。

難波（2009）と間瀬（2009）の研究成果を応用したとき、その他の関係性はメゾ構造やマイクロ構造において、マクロ構造における論理（様々な意図や機能をもった因果関係）を支えるものとして機能していると考えられることはできないだろうか。

ただし、小学校低中学年における教材では、順序性や上下関係、その他の関係性によってマクロ構造が構成されているものも多い。しかし、この場合についても、〈説明〉や〈感化〉のために主張・判断を支える理由・根拠が順序性や上下関係、その他の関係性によって示されているわけで、命題間のある種の論理を明らかにするために行われていると考えられる。これは、マクロ構造における論理が潜在化し、その論理を支える関係性だけが顕在化している状態とも言えるだろう。このように考えるならば、マクロ構造が論理でない関係性によって構成されているとしても、それは表現主体による読者意識の表れとしての論理的偏向であると考えることができるだろう。

(3)論理的認識力の概念規定

前項までに述べたことを整理すると図4のように示すことができる。

論理を因果関係とみる狭義の論理的思考力は「マクロ構造における論理を解釈する能力」として機能する。議論のマクロ構造における論理／論証の有り様を解釈することが主な役割である。

そして、「メゾ構造・ミクロ構造における関係性

(論理を支える関係性)を解釈する能力」は、議論のマクロ構造における論理／論証を支えるメゾ構造、ミクロ構造を構成する順序性、上下関係、その他の関係性の有り様を解釈し、どのように議論のマクロ構造を支えているのかを解釈することが主な役割である。

以上2つの能力群は有機的に一体となって広義の論理的思考力を構成すると考えられるため、常に両者の関係を問いつつ、解釈を進めることが重要である。

また、日常の論理の偏向に対応するために、意味内容の真偽性・妥当性の検討が必要である。そこで、「意味内容の真偽性・妥当性を検討する能力」を広義の論理的思考力に並ぶものとして論理的認識力の下位能力の一つに位置づける。このような批判的検討は論理およびその他の関係性の解釈に反映され、より適切な解釈を行うために生かされる。

それから、「表現主体の背景を解釈し、批判的に検討する能力」は、論理およびそれを支える関係性の解釈と、意味内容の真偽性・妥当性の検討に生かされる。意図・目的・感情などの表現主体の背景情報は、議論における事柄の取りあげ方、表現の仕方、論理構築の特徴を解釈し、批判的検討を行うときの手がかりとなる。

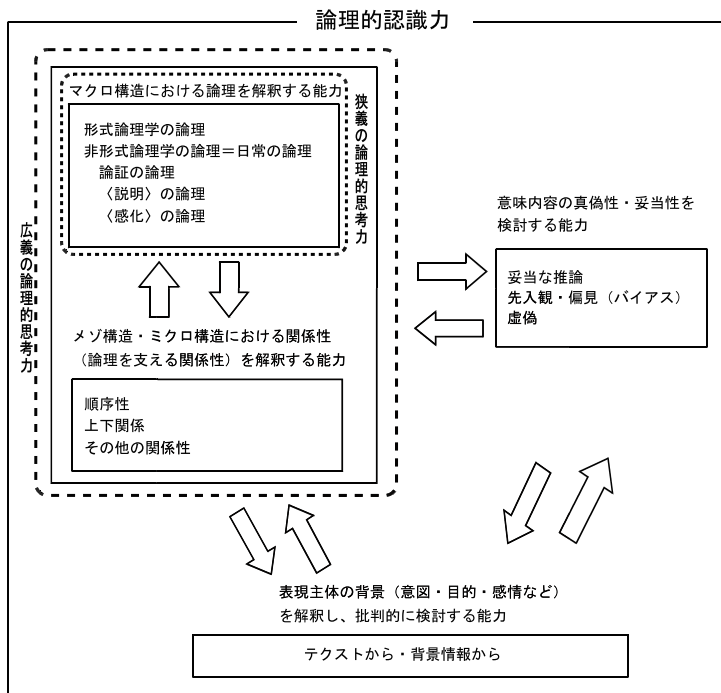


図4 論理的認識力の構造

これら3つの下位能力、「論理および、それを支える関係性を解釈する能力（広義の論理的思考力）」、「意味内容の真偽性・妥当性を検討する能力」、「表現主体の背景を解釈し、批判的に検討する能力」の統合的な能力として、論理的認識力を概念規定することにする。

3. 論理的認識力を盛り込んだ国語科授業の展望

論理的認識力を盛り込んだ場合、国語科授業においては、次のような点の改善が期待できる。

- ①テキストの論理を解釈する能力を高めることで複雑な構造をもったテキストを、マクロ構造に着目してシンプルにとらえる能力を育成することができる。
- ②テキストのマクロ構造における論理を手がかりにして、メゾ構造やミクロ構造において、論理を支える関係性を解釈する能力を育成することができる。
- ③意味内容の真偽性、妥当性の検討を通して、テキストの蓋然性を判断する能力を育成することができる。
- ④表現主体の背景を、テキストに窺える表現主体の個性や背景情報から解釈し、テキストにおける論理の偏向を予想する能力を育成することができる。

さらに、カリキュラム構造の改善が期待できる。先に述べたが、青山(2013a)では、Strandをスパイラルカリキュラムの基本構造であると指摘し、その可能性について言及している。このような構造化の考え方をもとにして、論理的認識力育成に関して3つの下位能力のそれぞれをStrandとして構成することで、カリキュラムをスパイラル型にすることができる。(図5)

このようなカリキュラム構造の改善によって、系統性の強化、実の場における指導の実現などが期待できる。

4. 今後の課題

本稿では、日常の論理に注目し、「論理」・「論理的

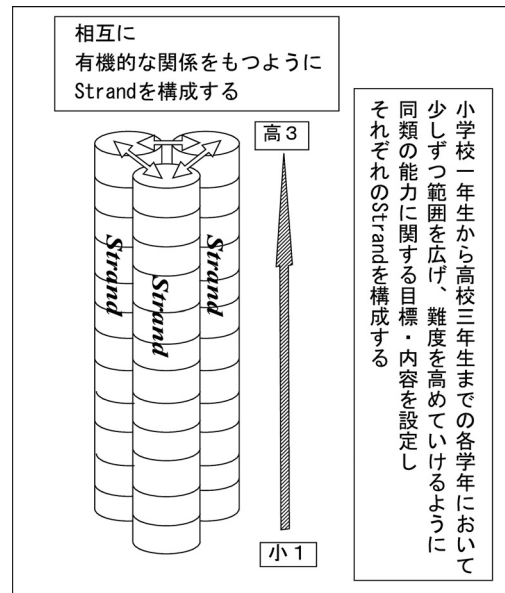


図5 スパイラルカリキュラムの構造

思考」の概念整理研究の成果を検討し、その限界を明らかにした。この結果をもとにして、日常の論理の偏向を扱うことのできる能力として、論理的認識力を措定した。論理的認識力の概念規定に関して検討を加え、近年の研究成果を踏まえて構造化を図った点で意義があると考えられる。

今後は、本稿において明らかにした構造の具体化を目指していかなければならない。そのためには、3つの下位能力群を小学校1学年から高等学校3学年までの12年間を貫くStrand群として再構成することを目指し、発達段階にあったそれぞれの目標の実際を探っていく必要がある。

5. 謝辞

本研究は、JSPS科研費25885113の助成を受けた研究の一部である。

【注】

- 1) 「論理／論証教育の思想(2)」(難波博孝, 2010, 『国語教育思想研究』No.2, pp.25-27)による。
- 2) 推論に関する直接的な議論ではないが、修辞技法に関する議論においても日常の論理に内在する偏向に関して述べているものがある。

佐藤(1992)は、私たちの認識が、工夫して表

現しなければ表しきれないほど多様であることを示し、言語使用にかかわる推論は意図的に偏向させる必要性が常にあることを示している。

また、香西(2007)は、論証技術の優秀な者は、論証を堅牢にするために自らの主張を説得力のある多くの根拠で武装するがゆえに、一人の人間の思想としての不自然さを生み出すことがあると指摘している。これは、説得を意図した論理構築がその主体の思想の統一を妨げてしまう場合があることの指摘であり、かなり強い偏向であるといつてよいだろう。

佐藤(1992)や香西(2007)が指摘しているように、日常の論理は表現主体の意図によってさらに強く偏向していくことが考えられる。

【参考文献】

- P. N. ジョンソン＝レアード(1988)『メンタルモデルー言語・推論・意識の認知科学ー』産業図書
- 青山之典(2012)「カナダ・オンタリオ州のReading Curriculumの構造の研究」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第一部第61号, pp.115-122, 広島大学大学院教育学研究科
- 青山之典(2013a)「Common Core State Standards for English Language ArtsにおけるReading Standards for Informational Text (K-12)ースパイラル構造をもった説明的文章読解カリキュラムの実際ー」『国語教育思想研究』7, pp.1-13, 国語教育思想研究会
- 青山之典(2013b)「Strand概念の導入による読解カリキュラム改善の可能性ー要点・要旨把握指導に焦点をあててー」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第一部第62号, pp.101-109, 広島大学大学院教育学研究科
- 青山之典(2013c)「日常の論理の偏向をどう教育で扱うかー論理・論理的思考力および周辺概念の再構築を通してー」『初等カリキュラム研究』, 投稿中
- 赤松明彦(2010)「認識論」『岩波哲学・思想事典』
- 市川伸一(1997)『考えることの科学』中公新書
- 井上尚美(2009)『思考力育成への方略ーメタ認知・自己学習・言語論理ー(増補新版)』明治図書
- 井上尚美(2012a)『『言語論理教育』指導の手引(小学校編)』『論理的思考を鍛える国語科授業方略【小学校編】』(井上尚美・大内善一・中村敦雄・山室和也編著) 溪水社
- 井上尚美(2012b)『『言語論理教育』指導の手引(中学・高校編)』『論理的思考を鍛える国語科授業方略【中学校編】』(井上尚美・大内善一・中村敦雄・山室和也編著) 溪水社
- 香西秀信(2007)『論より詭弁 反論理的思考のすすめ』光文社文庫
- 幸坂健太郎(2011)「国語科教育における『論理』・『論理的思考』概念の整理」『国語教育思想研究』No.3, pp.9-18, 国語教育思想研究会
- 佐藤信夫(1992)『レトリック感覚』講談社文庫
- 中村敦雄(1993)『日常言語の論理とレトリック』教育出版センター
- 難波博孝(2009)「論理/論証教育の思想(1)」『国語教育思想研究』No.1, pp.21-30, 国語教育思想研究会
- 難波博孝(2010)「論理/論証教育の思想(2)」『国語教育思想研究』No.2, pp.21-29, 国語教育思想研究会
- 難波博孝(2012)「論理/論証教育の思想(4)」『国語教育思想研究』No.4, pp.55-66, 国語教育思想研究会
- 波多野完治, 吉田昇, 木原茂編(1974)『現代の国語教育理論 認識と学力の統一』三省堂
- 舟橋秀晃(2000)「『論理的』に読む説明的文章指導のあり方ー『国語教育基本論文集成』所収論考ならびに雑誌掲載論考にみる『論理』観の整理からー」『国語科教育』47, pp.33-40, 全国大学国語教育学会
- 間瀬茂夫(2009)「説明的文章の読みにおける『論理』の再検討」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第58号, pp.103-111
- 森田信義(2011)『『評価読み』による説明的文章の教育』溪水社
- 山本信(1988)『哲学の基礎』北樹出版
- <キーワード>
論理的認識力, 日常の論理の偏向, 意味内容の検討, Strand, スパイラルカリキュラム
- 青山 之典(子ども発達教育学科)
(2013.11.25 受理)